

# 児童期における心の理論と自己理解および他者理解との関連について

—— 誤信念課題と個別インタビューを用いて ——

立命館大学大学院応用人間科学研究科

応用人間科学専攻対人援助領域 発達・福祉臨床クラスター

岡川一英

本研究の目的は、心の理論課題である誤信念課題と日常生活における自己の理解、他者理解がどのように関連しているかを検討することである。「心の理論」は誤信念課題を指標とし、「他者を理解しているか」の基準になっているが、課題に通過した児童と通過していない児童では日常場面の考えや行動に違いはあるのかという疑問がある。本件研究では、心の理論の一次的水準から二次的水準の移行期に当たる小学生1年生から3年生の42名を対象に、心の理論課題（誤信念課題）「アニメーション版“心の理論”課題 Ver. 2、DIK 教育出版」（藤野 2005）に収録されている DVD を用い、一次的誤信念課題 2 題と高次誤信念課題 2 題、二次的誤信念課題 1 題の計 5 題と、日常生活における自己理解と対人関係の理解に関する 13 項目の質問を個別インタビューで実施した。研究 1 では、5 題ある心の理論課題の通過率を学年ごと、性別ごとに分類し分析した。その結果、高次誤信念課題のおもちゃ箱の問題は低い通過率であったが、小学 2 年生から小学 3 年生にかけて通過率が急激に伸びており、発達の節目が推察される結果となった。二次的誤信念課題（焼きいもの問題）は、先行研究より全体の通過率が低かった。学年別男女の課題通過率比較では、小学 1 年生のすべての課題において女子の通過率が男子の通過率より高かったことから、女子が男子より早く心の理論を獲得することが推察された。研究 2 の個別インタビューで分かったことは、友達と自己を比較する場合、全学年で友達の似ているところ、違っているところを身体的・外的特徴で捉える傾向にあり、小学 2 年生以降には内面的特徴でも友達を捉えることが出来ることが分かった。他者（友達・大人）の誰を重視するかに関する質問では、小学 1 年生は大人（親・先生）を重視し、小学 2 年生は友達、小学 3 年生では大人と友達を必要に応じて使い分ける傾向にあることが分かった。また、友達の関係の質問では、単なる遊び相手から協力し合う関係になり、友達に依存せず、遊びと協力を両立し、友達関係を構築しようとしているのではないかと思われ、大人との関係では、保護される立場の大人志向から、自身の事がある程度処理できるようになり、大人志向から友達関係を深めていく友達志向に変化していくのではないかと思われた。研究 3 では、個別インタビューの質問で他者および友達に関する回答から、大人志向・友達志向のコメントを選出し、集計した。心の理論課題では、一次的誤信念課題と高次誤信念課題の 2 課題の通過状況と大人志向と友達志向の回答のクロス集計から課題とインタビューの関連から分析を行った。その結果、一次的誤信念課題と友達志向との関連が見られ、一次的誤信念課題（一次的水準）を通過しているため、他者の理解ができ、友達とのコミュニケーションが成立し友達関係が構築できるのではないかとされる結果となった。